

リレーエッセー
大きなあれ
Vol.7

ご飯は残さず食べようね

週刊レキオ・2002・5月掲載

帰依龍照



『土曜日はお寺の日』と勝手に銘打ち、本堂で毎月第二・四土曜日に『土曜学校・子ども会』なるものを立ち上げた。
総合的学習、週五日制、核家族化：今の子どもたちが「ゆとり」ある時間を過ごすように、また、地域を知り、多くの物事を学ぶご縁となるよう、学際的人間“の育成を目指して」と言えば格好良いが、正直なところ元来の子ども好きが高じてのことだ。
寺を訪れる子どもたちとの交流は、小生自身癒やされる時間でもあり、また多くのことに気付かされる楽しいひとときである。
「何で中学生からは、算数じゃなく数学って言うわけ？」、「ねえ、どこからが東シナ海でどこからが太平洋？」、「エスカルゴの料理をテレビで見たんだけどさあ、アフリカマイマイ捕まえて帰ったら、何でお母さん怒るわけ？」
子どもならではの素晴らしい着眼点ではあるが、質問を受けた上はこちらも勉強である。うーん、難しい、難しい。

そんなある日、毎回参加してくれる小学四年生のR君から、こんな相談を受けた。
「給食を残さずに食べることは卑しいことなのかな？」
話の経緯はこうである。給食の時間、ご飯の最後の一粒まで食べていると、周りの友達から「お前、そんな卑しい食べ方するな！ 普段家で飯食わせてもらっていないのか！」
とからかわれた。二両親からも、「出されたものは残さず食べなさいね、としつけていたことが裏目に出たのでしようか」と、その日のうちに涙ながらに相談を受けた。子どものころ、祖母から「お米は、お百姓さんの八十八の苦労があつて、やっと出来上がるんだよ。だから、米という文字も、八十八と書くんだよ。感謝して、残さず食べようね」と教わった。私たちの

口に入るまで、いかに多くの過程やそれにかかわる人の苦労があるか。今一度、食事について考えさせられる相談だった。
後日、本人の承諾を得て、「土曜学校・子ども会」のみんなと食事について考えた。『いただきます』『ごちそうさま』の意味、ほかの命をもらって生きている私たちの毎日の食生活。少し難しいかなと思いつつも、小生なりの解釈で話を進めた。上は高校生から、下は三歳児まで。一人ひとりが真剣に聞き、意見を發表した。
帰り際、R君からひと言。
「僕、これからもご飯を残さずに食べるね。ありがと、いただきます。すつて気持ちで残さずに食べるね」
この言葉を待っていた。なんともううれしい限りである。すかさず三歳のN子ちゃんか、
「そうだね、ご飯粒が残ると、



CEC学童クラブ
(中城村南上原)

遊び場スケッチ

オシヤベリは
CEC学童クラブのみなさん



毎週土曜日の太鼓練習日におじやましたよ!



「太鼓の練習はとっても好き。学校も太鼓もどっちも好き」「太鼓の練習は毎週土曜日にあるんだけど、今日の練習は人数は少ない方かな」「練習の後はお腹がすくよ。手も痛くなる時もある。皮むけたことはまだないけど」「先生はときどき厳しいかな」「浦添のてだこ祭りとかに出たり、老人ホームを訪問したりするよ」「上級生の上手なニーニーやネーネーたちぐらいになったら、内地に行くこともあるって」「好きな曲はミルクムナリとかオリオンピールのCMの曲とか」「夢に太鼓が出てくる時もあるよ」



このコーナーは、日々子どもたちとかかわる方たちのリレーエッセーです。
〔執筆者〕
□ 帰依龍照(住職)
□ 宮城英雅(小児科医)
□ 平良辰浩(学童クラブ指導員)
□ 下地直也(保育士)
□ 真栄城栄子(くすぬち平和文化館)
□ 新里恒彦(ケルン苑主管)
ご意見をはがきかファクス、Eメールで編集部までお寄せください

お皿を洗う時にお母さんが困るからねえ」
うーん、少し違うような気もするが、これからも感謝の心を忘れずに、みんなでいろいろ勉強していこう。
(コザ真宗時旧コザ本願寺・住職)